

主 題：世の罪を取り除く神の小羊2
聖書箇所：ヨハネの福音書 1章29節

前回に引き続き、「世の罪を取り除く神の小羊」の今回はパート2です。前回は昨年9月でしたから半年前ですが、そのことを思い起こしていただきながら今日のメッセージを聞いていただきたいと思います。ヨハネ1：29がテーマの聖句になります。「その翌日、ヨハネは自分のほうにイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」、前回は「世の罪を」を学びました。神が世界を創造された。そして、人をご自分の形に似せて創造されたと学びました。神はご自分の形に似せて人を創造されたその時に、人は神の性質を備えて造られました。神のご性質の義と聖、「正しい、聖い」を伴って造られました。ところが、人間、私たち人類の先祖である最初の人、アダムが罪を犯すこととなります。アダムとエバは神が備えられたエデンの園に置かれました。最高の環境、場所に置かれました。そして、神は彼らにこのように言われました。創世記2：16-17「神である【主】は人に命じて仰せられた。「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。：17 しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるとき、あなたは必ず死ぬ。」。人間に出された神からのたった一つの条件は「善悪の知識の木からは取って食べてはならない。」ということでした。それ以外は一切自由でした。その「エデン」、「快樂、楽しみ」という意味の場所が人間のためにわざわざ設けられたのです。罪の犯しようがなかった環境の中であって人間は罪を犯したということを前回学びました。

どのような罪か？「取って食べてはならない」と言われた木の実を取って食べたのです。新約聖書ではそれを「不従順のために」と書かれています。人間は神に対する不従順のゆえに罪を犯したのです。神の正しさ、聖さという神のご性質を頂きながら、なぜ、人は罪を犯したのか？私たちににとっては本当に不思議なことですが、神は人間を人造人間には造らなかったということです。絶対に罪を犯さない、自分の思いのままに動くような人間を造ろうと思えば造れたのに、敢えて、そのようにしなかったのです。なぜなら、人間は自由意志をもって神に従う、神を礼拝する、そのことを神は望まれたからです。そして、人をエデンの園に置かれました。ところが、人間が罪を犯したためにエデンの園から追放され、人類に死が入りました。一人の人アダムによって罪が入り、そして、死が人類に入り込んだと聖書はそのように教えています。神の罪に対するさばきは死でした。そして、人間は永遠に神から分離されるのです。「死」は分離を意味しますから、生きたいのちの源である神から分離されて死という状態に置かれたということです。神とは交わりができない性質になってしまったと聖書は教えます。

☆罪人のために、神はどのような方法で罪を処理して下さるのか？

それで終わってしまったら神のご愛を、また、神が人をお造りになった目的もなかったこととなりますが、神はこのようにして罪を犯した人間を救うためにご計画をもっていただくと私たちは聖書を通して教えられます。「新約は旧約の中にあり、旧約は新約の中にある。新約は旧約の中に隠れ、旧約は新約の中に現われる。」と、ヘンリエッタ・C・ミアーズという神学者がこのように記しています。ですから、旧約聖書で分からないことは新約聖書を読んだ時に「ああ、このことか」と分かります。また、その反対の場合もあります。聖書記者たちは「昔、聖書に書かれてある通りに、」と言い、また、イエスが弟子たちに語られる時に旧約聖書の箇所を引用されます。ですから、自由に新約と旧約がやり取りされています。残念ながら、私たちはともすれば旧約聖書を余り読まないで新約聖書だけを読んでしまいがちですが、聖書は一冊の本ですから、旧約、新約とも同じように読んで、神の私たちに對するすばらしい救いの計画を感謝したいと思います。

I. 神の救いのご計画

先ほど話したように、世界の創造される前から、人が罪を犯す前から、神の救いは神によって計画されていました。なぜなら、アダムが罪を犯すことは、神がお造りになる前から知っておられたから、彼を、そして、彼の子孫たちを救おうとして救いの計画を立てていたということ了新約聖書で教えられます。エペソ1：4に「すなわち、神は私たちが世界の基の置かれる前から彼にあって選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。」と書かれています。また、Iペテロ1：18-20には「：18 ご承知のように、あなたがたが父祖伝来のむなしき生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、：19 傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。：20 キリストは、世の始まる前から知られていましたが、この終わりの時に、あなたがたのために、現れてくださいました。」とあります。聖書はこのように教えています。ですから、アダムが造られる前から、罪を犯す前からこのように神はイエス・キリストを通しての救いを計画されていたことを見ることができます。

1. 旧約の福音

旧約聖書にももちろん、良い知らせが記されています。

1) 原始福音 : 創世記 3 : 15

前回、「世の罪」のところで学んだ創世記 3 : 15、原始福音と言われる箇所があります。「わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつく。」、もちろん、アダムがこの神のことばを聞いたとき、イエス・キリストの救いを思い浮かべた訳ではありません。彼には分からなかったことですが、今、新約聖書を手に行っている私たちにはこれが何を意味するのかを理解することができます。

⇒新約聖書の応答

ヘブル 2 : 14-15 「そこで、私たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。」、イエス・キリストの死によって悪魔という死の力を持つ者を滅ぼし、そして、人々を解放すると教えています。

2) 救世主預言 : イザヤ 53 : 3-6

また、救い主としてこのような預言が為されています。イザヤ 53 : 3-6 「:3 彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。:4 まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。:5 しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。」、このような苦しみの人が記されている時、イスラエルの多くの人たちは彼は彼自身の責任で神に罰せられたのだと思いました。しかし、そうではなかった。「彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。」、イエス・キリストは最終的に十字架にかけられましたが、それ以前にも何回も石を投げつけ、ムチ打たれ罵声を浴びせられ、つばを吐きかけられたと記されています。迫害に遭われましたが、それは私たちの咎のためだったと聖書は教えています。「:6 私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かって行った。」、人々は自分の好きな生き方をしていた。でも、そのような中であって「しかし、【主】は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。」と言います。これが旧約の預言です。

⇒新約聖書の応答

I ペテロ 2 : 24 「そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」。私たちの罪をご自分から十字架の上で負われたと言います。イザヤ書に「【主】は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。」とあるように、このことばが新約の時代になって実現したことを見るすることができます。「罪を離れ」とありますが、「離れ」とは不定過去という時制で現実にあったことです。「罪に死に」という意味です。

2. 新約の福音

「救世主が現われた」ということがいろいろな箇所に記されていますが、私たちがよく知っているヨハネ 3 : 16には「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」とあります。罪によって永遠の死を宣告された私たちが、永遠のいのちを持つために、神はそのひとり子をお与えくださったと聖書は約束しています。これが新約聖書におけるすばらしい知らせです。

II. 罪を取り除く

人は罪を犯しました。ですから、その罪の結果、ペナルティとして神によってさばかれ「死」という罰を与えられました。ローマ 6 : 23に「罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。」とある通りです。罪を解決する方法は、私たち人間には何一つありません。人間がどんなに努力しても良い行ないをしても、修行しても、滝に打たれても、痛い目を我慢しても、人間が自分自身で神の罰から免れるすべはないと聖書は教えています。けれども、私たちはその様な中であって神を満足させることが必要でした。私たちにはできない、けれども、何かが必要であると聖書にはそのことへの答えを私たちに与えています。

1. 旧約における神の備えられた方法

神の定める方法がありました。一年前の学びでは「幕屋、聖所、至聖所」を見ました。神はイスラエルの民が神を礼拝する場所を造りなさいと言われました。特別な場所を造るようと命じられました。人々は神が命じられたように、幕屋の中に聖所と至聖所とを造りました。至聖所は年に一度だけ大祭司が入ることができます。それ以外は入れないように聖所と至聖所との間は幕で仕切られていたと話しま

した。そのような幕と、そして、人々の罪を贖うために、赦していただくために、神の示された方法で大祭司が「贖いの日」という年に一度の日にそこに入り、ほふられた動物の血を契約の箱の蓋に振りかけるといふ、そのようなことを学びました。神はそのような方法を旧約聖書の時代に備えられました。けれども、それは毎日、あるいは、一年に一度、繰り返し行なわなければならない救いの方法でした。その目的は？

1) 罪を贖うため レビ 17 : 11

「なぜなら、肉のいのちは血の中にあるからである。わたしはあなたがたのいのちを祭壇の上で贖うために、これをあなたがたに与えた。いのちとして贖いをするのは血である。」。罪を贖うためには血が流さなければならない、しかも、その祭壇の上でということです。この「贖う」というのは特別なことばです。

◎「贖う」

ヘブル語でもいろいろなことばが用いられています。

a. キツペル

カーファル「覆う」ということばの強意語、強い意味を持ったことばで「罪を無効にする」という意味です。レビ記 4 : 27-31、16 : 15-17 で用いられています。本来はアラビア語のカーファール「覆う」、シリア語のキファール「拭い去る」が語源です。ですから、旧約時代の「贖う」というのは「罪を覆う、拭い去る」という概念があったのです。また、創 6 : 14 では「塗る」、32 : 20 では「宥める」、イザヤ 47 : 11 「払う」、エゼキエル 16 : 63 「赦す」ということばが使われています。

b. ガーアル

「救い出す」、代価を払って以前所有していたものを買戻すという意味です。これが基本的な意味です。出エジプト 6 : 6、15 : 13、レビ 25 : 25、26 に使われています。

c. ガナー

イザヤ 11 : 11、出エジプト 15 : 16 に使われています。「買い取る」という意味です。

d. カツポレース

出エジプト 25 : 22、レビ 16 : 2~ に用いられています。「カーファルする所」、神の臨在の場所という意味です。出エジプト 25 : 22 には「わたしはそこであなたと会見し、その『贖いのふた』の上から、すなわちあかしの箱の上の二つのケルビムの間から、イスラエル人について、あなたに命じることをことごとくあなたに語ろう。」、契約の蓋にかぶせられたのが贖いの蓋です。ケルビムで覆われていて、その中には十戒が記された二枚の石板が納められていました。神はその贖いの蓋の上から臨在されて、そして、あなたに命じることをことごとく語ろうと、このように言われました。「あなた」とはもちろんモーセのことですが、レビ 16 : 2 には「【主】はモーセに仰せられた。「あなたの兄アロンに告げよ。かつてな時に垂れ幕の内側の聖所に入って、箱の上の『贖いのふた』の前に行ってはならない、死ぬことのないためである。わたしが『贖いのふた』の上の雲の中に現れるからである。」とあります。決められた年に一回の「贖いの日」である 7 月 10 日にだけ入っていい。しかも、大祭司以外は入ってはならない、そして、決められた方法で入ると、非常に厳しく定められていました。そのことを神はモーセに告げられたと言います。聖所と至聖所には敷居、垂れ幕があって仕切られており、他の祭司は入れませんでした。一般の人は聖所にも入れなかった。そのような厳しい律法がありました。「贖う」ということはそのように厳しいルールが定められていました。

2) 罪を赦すために レビ 4 : 26, 31, 35、 5 : 13, 16

ここには「祭司はその人のためにその人の罪の贖いをしなさい。その人は赦される。」とあります。これは一般の祭司ですが、人々に代わって犠牲の血をささげて罪の贖いをするのができた、そして、その結果、その人は「罪を赦される」と書かれています。

3) 不完全な罪の赦し ヘブル 10 : 1

旧約の福音はこのような良い知らせでしたが、実は限定的で不完全でした。ヘブル 10 : 1 には「律法には、後に来るすばらしいものの影はあっても、その実物はないのですから、律法は、年ごとに絶えずささげられる同じいけにえによって神に近づいて来る人々を、完全にすることができないのです。」と書かれています。律法で決められたことは「後に来るすばらしいものの影は」ある。「後に来るすばらしいもの」とは「イエス・キリスト」です。その影があると言います。しかし、実物ではない。だから、影であってあくまで不完全です。「年ごとに絶えずささげられる同じいけにえによって」と、繰り返してそのように贖われることが必要だから、来る人々を完全にすることができないと聖書は教えているのです。それが旧約聖書に見る神の方法です。

2. 新約における神の備えられた方法

1) 罪を贖う

同じように、「罪を贖う」ということが教えられています。

◎「贖う」

a. ヒラステリオン ヘブル9：5

「また、箱の上には、贖罪蓋を翼でおおっている栄光のケルビムがありました。しかしこれらについては、今いちいち述べることはできません。」、ここには「贖いの場所」が記されていますが、それがヒラステリオンです。契約の箱の蓋＝贖罪蓋＝です。「…今いちいち述べることはできません。」とこれが旧約の方法でした。神はそこに臨在されて人々の罪を赦されたのです。

・「ヒラスモス」＝このことばは「怒りを和らげる、なだめる」という意味でローマ3：25でこのように用いられています。「神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現すためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。」。ご自身の義を現わすために、神が聖い方であるから、イエス・キリストが血を流される以外の方法をもっては神の義を満たす方法はない。人間のどんなにすばらしい性質でも、どんなにすばらしい行為でもだめだと言っているのです。「なだめる」とは「怒っている者が何らかの方法によって満足を与えられ、怒りを和らげること」です。

・「ヒラスコマイ」＝ヘブル2：17には「ヒラスコマイ」ということばがあります。「そういうわけで、神のことについて、あわれみ深い、忠実な大祭司となるため、主はすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません。それは民の罪のために、なだめがなされるためなのです。」。神の怒りをなだめるためにイエス・キリストが忠実な祭司となってくださった、私たち全人類の罪のためにと、新約聖書はこのような教えているのです。動物ではありません。イエス・キリストです。

b. ルトロニ マルコ10：45

「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いという意味で用いられています。「贖いの代価として」ご自分のいのちをささげられたということを私たちに教えるのです。

c. エクサゴラゾー ガラテヤ3：13、コロサイ4：5

「買い出す」、ガラテヤ3：13「キリストは、私たちのためにのろわれたものとなって、私たちが律法ののろいから贖い出してくださいました。なぜなら、「木にかけられる者はすべてののろわれたものである」と書いてあるからです。」、代価を払って奴隷の身分から解放するという意味です。一度買い取られたら、再び、他の人の手に渡ることにはないのです。神と人との交わりが回復されるのです。

d. アポルトローシス ローマ3：24、ヘブル9：15

「代価を払って奴隷を買い出す」と用いられています。ローマ3：24「ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。」。

e. カタルラゲー ローマ5：11、11：15

ここには「和解」ということばが記されています。ローマ5：11「そればかりでなく、私たちのために今や和解を成り立たせてくださった私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を大いに喜んでいるのです。」、「和解、和らぐ」とは「仲の悪い者どうしが和解すること」です。

このようにして神は新約聖書で「贖い」とはこういうことだと教えているのです。

2) 罪を赦す

ヘブル9：22には「それで、律法によれば、すべてのものは血によってきよめられる、と言ってよいでしょう。また、血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです。」と記されています。「血を注ぎ出すこと」、これが絶対的な必要条件だと言います。「エカリサト」ということばが用いられているエペソ1：7には「この方にあつて私たちは、その血による贖い、罪の赦しを受けています。これは神の豊かな恵みによることです。」と記されています。罪を赦すためにイエス・キリストの血が流されたというわけです。エペソ4：32には「お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。」とあつて、「恵み深く赦す」ということが教えられています。コロサイ1：14には「この御子のうちにあつて、私たちは、贖い、すなわち罪の赦しを得ています。」とあります。

3) 罪を取り除く

主題聖句を思い出してください。「…世の罪を取り除く神の小羊。」、「罪を取り除く」ということで、ヘブル9：26b「しかしキリストは、ただ一度、今の世の終わりに、ご自身をいけにえとして罪を取り除くために、来られたのです。」、Iヨハネ3：5には「キリストが現れたのは罪を取り除くためであったことを、あなたがたは知っています。キリストには何の罪もありません。」とあります。新約聖書では「罪を取

り除く」と書かれています。「覆い隠す」だけではなく、「塗りつぶす」だけではなく、イエス・キリストというその犠牲によって罪は取り除かれるということが新約聖書における良い知らせなのです。

Ⅲ. イエス・キリストは神の小羊

1. なだめの供え物 I コリント 5 : 7

「新しい粉のかたまりのままでいるために、古いパン種を取り除きなさい。あなたがたはパン種のないものだからです。私たちの過越の小羊キリストが、すでにほふられたからです。」、イスラエルの人たちにとって、これは何のことかすぐに分かったと思います。「過越の小羊」、あの出エジプトの時に神が為された初子を助けてくださる方法として、人々は小羊の血を家の門の柱とかもいに塗ってその難を逃れたという出来事があるのですが、そのことを思い起こすことができます。「過越の小羊」がイエス・キリストだと聖書は教えています。古いパン種、古い過越の祭りの習慣、それらを取り去りなさい。それは意味がない、無効になったからと聖書は言うのです。I ヨハネ 2 : 2には「この方こそ、私たちの罪のための——私たちの罪だけでなく、世全体のための——なだめの供え物です。」。ギリシャ語で「ヒラスモス」ということばが用いられています。なだめの供え物、すなわち、和解する、神の怒りを治める、なだめるためということでした。このようにして神の怒りをイエス・キリストという神の小羊によってなだめられたのです。

2. 旧約の型 創世記 2 2 章

神と交わるために、神に礼拝をささげるためにいけにえの小羊が必要だったことは繰り返して話しました。個人がその都度、小羊を準備しなければならなかった。でも、それは繰り返し必要なことであり、不完全なことでした。そして、罪人を救うために完全ないけにえを神が備えてくださるということを聖書は繰り返し教えています。

1) いけにえの必要性 レビ 23 : 1 2

「あなたがたは、束を揺り動かすその日に、【主】への全焼のいけにえとして、一歳の傷のない雄の子羊をささげる。」、傷があるのはだめでした。同じレビ 14 : 24-25 aにも「祭司はその罪過のためのいけにえの子羊と油一ログを取って、これを奉獻物として【主】に向かって揺り動かし、:25 罪過のためのいけにえの子羊をほふる。」とあり、旧約のしきたりはこのようでした。

2) 神のご計画 創世記 3 : 2 1

半年前に私たちはこの箇所を見たのですが、罪を犯したアダムとエバは神の顔を恐れて陰に隠れました。彼らは自分たちが罪を犯したことを恥ずかしく思って木の葉っぱを取って腰を覆った。この葉っぱで作った覆いは一時的なものでした。時がたてば枯れる物です。神がご覧になって、彼らのために特別なものを準備されたのです。創世記 3 : 2 1「神である【主】は、アダムとその妻のために、皮の衣を作り、彼らに着せてくださった。」、神ご自身が動物の犠牲の血を流され、そして、この動物の毛皮を取って、彼らのために罪を覆うものを備えてくださったことを見ました。皮の衣、これはキリストの型です。イエス・キリストが血を流されて人を救った。動物が血を流して、アダムとエバのからだを覆ったのは、その一つの型です。それは古い型を示しているということです。

イザヤ書 53 : 5に「しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために碎かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。」とあり、53 : 7には「彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。」と、痛めつけられ苦しんだ様子が記されています。これが私たちの罪を負って死んでくださった神の小羊の有様です。

(a) その予型

一番の予型は創世記 2 2 章で、神が備えてくださった犠牲について記されています。神はある時にアブラハムにこのように仰せられました。22 : 2「神は仰せられた。「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたしがあなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい。」、イサクはアブラハムが神によって約束されてできた子どもです。アブラハムが百歳の時に与えられた子です。その前に人間的な方法でイシュマエルがもうけられています。神によって約束された子はイサクだけでした。神はこのひとり子のイサクを「全焼のいけにえとしてわたしにささげなさい」と言われたのです。

アブラハムは信仰を試されたのです。この時イサクはもう二十歳前後だったと思いますが、両親にとっては大切に育てた子です。その子を「全焼のいけにえとしてささげよ」とは「何と酷いことを言われるのか！神様、いくらあなたの言われることでも私にはそんなことできません。」とアブラハムは答えることができたのです。アダムが「この木の実を取って食べてはいけない」と言われたのに取って食べたように、神に「ノー」と答えることが可能性としてはあったのです。けれども、そのように言うこと

は不従順です。それは罪です。アブラハムはイサクから「…全焼のいけにえのための羊は、どこにあるのですか。」と聞かれた時に、22：8「アブラハムは答えた。「イサク。神ご自身が全焼のいけにえの羊を備えてくださるのだ。」こうしてふたりはいっしょに歩き続けた。」。アブラハムの信仰はこのようでした。私の愛するひとり子でしたが、このひとり子の血を流すとはいのちを絶つということですから、酷いことを言われたけれど、神は必ず全焼のいけにえを備えてくださると彼は堅く信じていたのです。

*「全焼の」とは、ヘブル語でオラ、「上に上るもの、a) 香ばしい香りが立ち上る。b) ささげる者を神が受け入れられる、という意味です。

エペソ5：2に「また、愛のうちに歩みなさい。キリストもあなたがたを愛して、私たちのために、ご自身を神へのささげ物、また供え物とし、香ばしいかおりをおさげになりました。」とあるように、イエス・キリストが全焼のいけにえ、香ばしいかおりとしてご自身をささげられたのですが、それと同様のことが、創世記22章13、14節に記されています。「アブラハムが目を上げて見ると、見よ、角をやぶにひっかけている一頭の雄羊がいた。アブラハムは行って、その雄羊を取り、それを自分の子の代わりに、全焼のいけにえとしてささげた。」、アブラハムが三日の旅路を終えてモリヤの地に着いて、焚き木の上にイサクを置いて、まさに刀を振り上げて彼のいのちを絶たんとしたその時に、「待ちなさい」と神の声があった。「あなたの信仰はよく分かった。わたしが準備したその犠牲があるからそれをささげなさい。」と言われたのです。神が備えられた犠牲の小羊、それがイエス・キリストご自身を現わす型であることを私たちはここで知ることができます。もちろん、アブラハムにはそのことは理解できなかったと思いますが、彼は神は必ず備えてくださるお方だということが分かりました。14節「**【主】**の山の上には備えがある」と言い伝えられている。」。

ヘブル9：22-26をご覧ください。「:22 それで、律法によれば、すべてのものは血によってきよめられる、と言ってよいでしょう。また、血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです。:23 ですから、天にあるものにかたどったものは、これらのものによってきよめられる必要がありました。」、「天にあるものにかたどったもの」、それは影でした。天にあるものが本物です。このようにかたどったものはきよめられる必要があった。「しかし天にあるもの自体は、これよりもさらにすぐれたいけにえで、きよめられなければなりません。:24 キリストは、本物の模型にすぎない、手で造った聖所に入られたのではなく、天そのものに入られたのです。」、契約の箱の贖いの蓋の上に神は臨在されましたが、そのような手で造ったものではなく、まさに、天におられる神の右の懐に入られたのだと言っています。「そして、今、私たちのために神の御前に現れてくださるのです。:25 それも、年ごとに自分の血でない血を携えて聖所に入る大祭司とは違って、キリストは、ご自分を幾度もささげることはなさいません。」、イサクは神が準備された雄羊によって贖われました。一つの型でした。至聖所で大祭司が人々の罪を贖うのは、繰り返し行わなければならなかった。型でした。「:26 もしそうでなかったら、世の初めから幾度も苦難を受けなければならなかったでしょう。しかしキリストは、ただ一度、今の世の終わりに、ご自身をいけにえとして罪を取り除くために、来られたのです。」、イエス・キリストがただ一度だけ来られることによって、その罪が取り除かれると言っているのです。

ヘブル10：6-7には「:6 あなたは全焼のいけにえと罪のためのいけにえとで満足されませんでした。:7 そこでわたしは言いました。『さあ、わたしは来ました。聖書のある巻に、わたしについてしるされているとおり、神よ、あなたのみこころを行うために。』」、聖書のある巻とは、旧約聖書、また律法、モーセ五書と言われるものです。この旧約聖書にイエス・キリストについて記されている様々な型、予型、預言、それらのものを明らかに現わすために、神のみこころを行なうために「わたしは来ました。」と言われたのです。

(b) その結果 : 律法と恵みの対比

*人は行ないによって義と認められることはない。

人間は行ないによっては決して神の前に義と認められることはありません。ローマ3：20にはこのように書かれています。「なぜなら、律法を行うことによって、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。」。私たちがどんなに頑張っても全く聖いということは有り得ないと聖書は教えています。今までは間違っていたことをしていたからこれからは悔い改めて正しいことばかりしよう、これからはいいことばかり考えようと言ってもそれはだめだと聖書は言います。そのようなことは有り得ないと。「だれひとり神の前に義と認められない」、神の義と聖はそれ程までに完全だからです。却って、「あなたは罪人です」というその思いが生じるだけだと聖書は教えているのです。

ガラテヤ2：16に「しかし、人は律法の行いによっては義と認められず、ただキリスト・イエスを信じる信仰によって義と認められる、ということを知ったからこそ、私たちもキリスト・イエスを信じたのです。これ

は、律法の行いによってではなく、キリストを信じる信仰によって義と認められるためです。なぜなら、律法の行いによって義と認められる者は、ひとりもないからです。」とパウロは言います。

***救いは、ただただ神の恵みによる**

ローマ3：24「ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。」「キリスト・イエスによる贖い」、これは神の恵みだと言います。恵みとはただで与えられるものです。その代わりのもの、見返りを求めないものです。それが「価なしに」ただで義と認められると言うのです。ヘブル10：12-14には「:12 しかし、キリストは、罪のために一つの永遠のいけにえをささげて後、神の右の座に着き、:13 それからは、その敵がご自分の足台となるのを待っておられるのです。:14 キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によって、永遠に全うされたのです。」とイエス・キリスト以外にはない、たった一つの、しかも、永遠のいけにえでした。今、神の右の座にあって、私たちのためにとりなしをしてくださっています。エペソ1：7にも「この方において私たちは、その血による贖い、罪の赦しを受けています。これは神の豊かな恵みによることです。」と書かれている通りです。

結論：

イエス・キリストが十字架で亡くなられたとき、すべてのことは「完了した」、「事、成れり」と言われました。すべて、人の罪を赦すために神が行なうことは終わった、為されたのです。そして、その時、聖所と至聖所の区切りの幕が上から下まで裂けたのです。もう区切る必要はありません。なぜなら、大祭司がそこに入って犠牲の血をささげる必要はもうないからです。そういうものは古い契約なのです。イエス・キリストが「ご自身の肉体という垂れ幕を通して」と聖書は言っていますから、ご自身がその聖所と至聖所をなくされて、今は天の聖所で真の大祭司としてご自身を真の犠牲として携えて、そこで私たちのためにとりなしをしておられる。だから、この救いは完全なのです。だから、私たちの罪はただ単に塗られるだけでなく取り除かれるのです。すべての人のためにイエス・キリストは十字架に掛かってくださいました。けれども、すべての人が罪を取り除かれる訳ではありません。なぜなら、「イエス・キリストを信じる信仰によって」と聖書は教えています。このイエス・キリストが私の、また、あなたの神の小羊キリストである、救い主であると信じた人がその罪を取り除かれると聖書は教えています。決して行ないによるではないのです。

私たちはこの救いが神のただただ恵みであると教えられます。ヘブル9：11-12「しかしキリストは、すでに成就したすばらしい事からの大祭司として来られ、手で造った物でない、言い替えれば、この造られた物とは違った、さらに偉大な、さらに完全な幕屋を通り、:12 また、やぎと子牛との血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度、まことの聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられたのです。」、完了した、すべてが終わった、ということを新約聖書は私たちに教えています。

今日、本当に私たちが価なしに救われたこともう一度心から感謝したいと思います。また、この喜びをまだイエス・キリストを信じておられない方に伝えてあげたいと、そのような願いをもってこの一週間をお過ごしになられるようにお勧めします。